詩華集 日本漢詩

日本詩選他

詩華集 日本漢詩

第二卷

富士川英郎・松下　忠・佐野正巳編

汲古書院刊

詞華集　日本漢詩　第二巻

昭和五十八年九月　発行

定価八、五〇〇円

編集　富士川英郎
　　松下忠
　　佐野正巳
解題　佐野正巳
発行者　坂本健彦
印刷　モリモト印刷株式会社

発行　汲古書院
102　東京都千代田区飯田橋二―五―四
電話(二六五)九七六四　振替東京五―二五八〇三五

©一九八三

解題

佐野正巳

日本詩史・日本詩選

編者

江村北海

諸文献資料によって経歴・業績を略述しようとおもう。

明和安永のころ、もっとも著名であった詩の結社、賜杖堂の江村北海は、正徳三年（一七一三）寄寓していた母の兄明石藩士河村半右衛門の家で生まれた。北海は本姓は伊藤、名は綬、字は君錫、通称は伝左衛門、北海はその号である。父は福井藩儒の伊藤竜洲（一六八三―一七五五）であり、北海はその第二子である。

かれの主著「授業編」の序説には読書の心得と共に自伝を詳記しているので、今しばらくそれによって履歴を記述することにする。

正徳三年春、京都に大火があり、竜洲の家もその大火に罹災したため大火の後、「賃居不自由ナル故ヲ以テ」明石で妻は北海を生んでいる。そして竜洲の家も復興なり京都に還ったが、北海は祖母にしばしば明石へ招き迎へられ「九歳ヨリ十八歳マデ」明石の叔父河村氏で養育されている。河村氏は「明石ノ下大夫」故、家に蔵書なく、「余四書古文三体詩ナドノ素読ヲナラヒタルノミニテ、其ノ余タダ武芸ヲマナビ、オヨビ他ノ技芸、又ハ漁猟ヲ事トセリ。但幼童

ノコロヨリ書ヲヨムコトハ好メリ。叔父ノ家ニモ歌書物語ノ類、又軍書ナドハアリシ故、アルニ任セテ見ルマヽ、イツシカ和歌ヲヨミオボエ、又世ニイフ誹諧ノ社ニモマジワレリ」とあれば、これでみるところ騎射に専念したり好んで習俗の俳諧に余念がなかったようである。山村蘇門の「清音楼集」五所収の「北海先生墓碣」文は、だいたい右の「授業編」の内容と同じである。ところで、その誹諧の席上、明石藩儒梁田蛻巌（一六七二―一七五七）に会い「足下ハ実ニ錦繡ノ心腸アリ。是ヲ以テ芸苑ニ駆逐セズシテ、イタヅラニ誹諧ノ用トナスハ惜ムベシ」と北海の才能を愛し、家学を研尋することを説き、三年にして先業を羽翼せしめた。ときに北海二十一歳であった。

兄錦里は経史をもって聞え、弟儋叟は文章に名があり、世に伊藤氏三珠樹と称せられた。錦里は福井藩儒として祇役し、弟儋叟は父の旧姓清田氏を冒し、やはり福井藩儒となり藩主の侍講となった。

北海はその年、享保十八年（一七三三）、二十一歳にして丹後宮津藩儒となった。晩年松江藩儒の桃白鹿に宛てた書簡に、「老拙義廿一歳ニ而青山侯（只今之美濃郡上侯）之文学ニ出身在京ニ而罷有」とあるによって明白である。翌、享保十九年（一七三四）、二十二歳のとき、父竜洲に代わって生徒に経史を講説した。同年、父の友人江村毅庵は一封の書を以って後事を、父竜洲に託して没し北海は出でて江村氏を継いだ。（「略系図」十九頁参照。）

江村氏も、専斎、剛斎、訥斎、毅庵と儒者を輩出した名家である。北海の賜杖堂という号は実は専斎が後水尾帝から鳩杖を賜わったことに由来している。伊藤東涯の「盍簪録」に、「江村宗具世住二京師一、居二新在家中町一、嘗仕二于賀藤肥後侯一、後仕二于美作一、常専二修養一、歯満二百齢一。後水尾帝在レ院聞レ之、召対、賜以二銀絹鳩杖等一」とある。この話は、伴蒿蹊の「近世畸人伝」にも紹介された。

その後、寛保二年北海は京都留守居役を命ぜられている。前述の桃白鹿宛書簡に「三十歳ニ而京都留守居役ニ被申付右之俗吏ヲ廿二年相勤」とあり、安永四年（一七七五）致仕するまでこの役にあった。北海の履歴を三期に分けるとすれば、二十歳までの修業時代を第一期、致仕するまでの青山侯文学時代を第二期、致仕後、七十六歳で没するまで

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

を第三期とすることができる。

穀庵に次いで宝暦五年（一七五五）父竜洲が没した。七十三歳であった。伊藤坦庵の門人であり、その学問は坦庵に譲らなかった。そして数年の後の宝暦八年（一七五八）北海、四十六歳のとき藩主青山幸道の美濃郡上への移封に伴ない郡上に行くこととなった。藩主は北海に吏才あるを知り重用したが病（脚疾）を得、辞任をねがったがなかなか許されず、宝暦十三年（一七六三）四月、五十一歳のときついに許されて京に帰った。柚木太玄の「北海詩鈔」初編叙に「骸ヲ乞フコト益ス固シ。公已ムヲ得ズ之ヲ許ス。実ニ宝暦癸未夏四月ナリ」とある。その間、五年のあいだ、余り業績を上げていない。ただ宝暦十二年（一七六二）、北海が元文年中（一七三六―一七四〇）二年ほど東都に祇役中に書き置いた随筆「虫の諫」を宝暦九年冬ごろ序を付し完成させ、この年、宝暦十二年の秋、平安書肆の唐本屋吉左衛門から上中下の三巻として発行している。被見するに、木村蒹葭堂（上巻四葉、下巻二葉）、玄玉（中巻二葉）、福原五岳（下巻二葉）など池大雅の門人が挿画を描いており、雅趣に富んだ随筆である。木村蒹葭堂や福原五岳が挿画を描いたについては北海と大雅堂との関係があろう。津坂東陽の随筆「蒓瓚録（わさんろく）」に次のごとくにある。

池無名初めは勤と名づく。江村北海に請うて命じたり。故に初年の画には池勤と署せるが今もあり、即にして自ら思けるは、我が如き散人逸民にして勤などと称するはをこがまし。此方底は名なき者のみと。遂に北海に詣りてことはり言て名の字を反納せり。

宝暦十三年、京に帰った北海は、水を得た魚のように意欲的に業績に励んだ。すなわち明和三年（一七六六）秋から「日本詩史」の著述に励み、明和五年（一七六八）に成稿をみた。「日本詩史凡例」によれば、本書はもと十巻とする予定であったが、まずその半部を梓行せんとして、次男悰秉（号愚亭）に校訂せしめたが、明和七年二月若くして父に先立って死んだ、二十七歳であった。北海は鍾情の極のうちに詩史の修訂をしつづける。業を助け重校をおこなったのは北海の弟清田儋叟であった。「日本詩史」凡例に、「今茲庚寅二月、悰秉疾ニ罹リテ没ス。長夏無事、殆ンド日ヲ鎖

シ難シ。乃チ旧業ヲ修メ、且ツ以テ憂ヲ遣ル。会々弟君錦、関ヨリ過ギル。乃チ其レヲシテ重校セシメ、以テ剞劂ニ付ス」（原漢文）とある。そしてついに明和八年（一七七一）六月刊行された。

これより前、「日本詩史」の著述の最中すなわち明和四年（一七六七）に、「北海先生詩鈔」初編（二巻二冊）が刊行されている。「日本詩史」の刊行の翌年つまり明和九年（安永元年と改元）にこんどは、兄錦里を失なっている。安永二年九月九日に前述の桃白鹿に宛てた書簡に「老拙実方之祖父伊藤悰恕越藩之文学ニ而在京実父相続実父跡ハ老拙兄相続此兄ハ去年相果」とある。安永四年、藩主青山幸道の隠居を機に致仕するまでに北海は「日本詩選」編纂の大業を成し遂げている。こんどは姪の清田大太郎（竜川と号す）と門人の永田忠原とが校定を手伝っている。他に前述の桃白鹿の養子、桃西河（せいか）（のちに松江藩儒）が校書に加わっている。西河の「負笈日暦」に「二十三日尽日在賜杖堂。校日本詩選」（安永三年四月）「二十六日終日在北海先生許校書」などとたびたび散見し、西河が師北海を助け「日本詩選」の校書をおこなっていることは明らかである。とにかくこれらの人たちの校書の甲斐あってこの年安永三年正月に「日本詩選」が刊行をみている。

致仕後は、京都室町に対梢館を建て翰墨を以て自ら娯んでいる。当時、詩風が注目されたというのではないが人気のあった「明七才詩」の注釈を北海はおこなっている。安永四年刊行の「明七才子詩集訳説」がそれである。その後、八年に頼春水に宛てた書簡をみると、北海は、混沌社中とかなり接近している模様である。そればかりでなく「老拙事同町内ながらよき所ありて急に宅替いたし候」とあって移居のことがみえている。頼桃三郎氏は「これは昔の山吹町であろうかどうか」（「詩人の手紙」三九頁）としている。頼春水の「東遊雑記」に、「〇江村伝左衛門　東南山吹町」とある。この年、前選の「日本詩選」が北海の意に満たなかったせいもあって、やはり清田大太郎と門人の山田鼎石（字は子成、山瑛と修す。のちの大垣藩儒）の校書を得て「日本詩選・続編」八巻七冊を刊行している。郡上藩では幸道が隠居ののちは幸完が二代藩主となった。この藩主幸完の天明年間に藩校潜竜館（初め講堂）が設立をみた。この設立計画

に与ったのは無論江村北海であったことは言を俟たない。そして、北海は天明以後はとくに自己の詩集の出版および教学方面の出版に余念がなかったのである。

「授業編」は北海の「授業編序説」に「天明改元辛丑ノ秋九月」とあるとおり、天明元年（一七八一）九月に脱稿、天明三年癸卯五月に梓行されている。そしてこの書のはじめに記載のある「授業編総目」二十巻のうち十巻までがこの年に開版された。十巻とは「巻之一、幼学・習句読（ソヨミ）・学書（マナブノフミ）　巻之二、読書自一則至三則　巻之三、訓点・呉音漢音・四声五音・韻鏡反切・唐音　巻之四、教授・講経・講釈自一則至二則・書生之学・講談　巻之五、歴史学・諸子学　巻之六、作文自一則至七則　巻之七、詩学自一則至五則　巻之八、詩学自六則至十四則　巻之九、寿賀・寄題詩文・地名自一則至三則・和習　巻之十、姓氏・名字号・称呼・著書・蔵書・闕疑」等であり、「残ル半ハ計（ハカ）ルニ明年ノ秋ノコロハ改正ノ業ヲ卒（オフ）ベシ」と「凡例」にあるが残る十巻は版本になったということを知らない。天明六年に刊行をみた「北海先生文鈔」初編の刊記の前の北海先生著述目録には、「授業編」の十巻五冊本ののちに版本になった北海の著述には○楽府類解五冊○北海文鈔初編三冊の二点を数えるのみで「授業編」の「残ル半ハ」刊行された形跡は見当らない。

これより前、天明二年（一七八二）には、清田大太郎の編輯、端春荘（清田儋叟門人）の校書で「北海先生詩鈔」三編五冊が刊行をみている。北海の血脈につながる者や弟子が献身的に編輯や校書を手伝ってくれている。学問と教育の一体化がこゝに存在するといえよう。この年、北海は七十歳であり、賀宴が張られたのである。そのときの寿詩を集めたものが「東山寿宴集」（江村北海寿宴賀詩集）である。武村良弼の編集になり天明三年開版されもした。残念ながら稿者はまだ被見していない。賀宴の前年、某氏宛の北海の書簡（「名家手簡」初集下所収）の文面にも次のごとくある。すなわち、「老拙事明年ハ犬馬弊齢七十ニ相成候依之子弟輩相謀明年三月十四日東山ニ而一筵ヲ相催シ可申ト居申候」とある。

その後、天明五年（一七八五）には、弟清田儋叟を失なうことになる。北海の業績にとって儋叟の援助は絶大なもの

がある。そしてついに三年後の天明八年には、北海自らが命を絶つことになる。七十六歳であった。

北海には三人の子があり、兄の方は俳人の樋口道立である。道立は源敬義と修し、川越藩の京都留守居役であった。「君錫有二子、兄名敬義字道卿、出後于樋口氏、為前橋侯邸吏、以篆書有名」（「北海詩鈔」序、金龍道人敬雄撰）とある。弟悰秉が夭折したことはすでに述べた。

日本詩史

諸本

「国書総目録」には、五巻三冊、明和八年刊として所蔵者の名をあげている。

主なものとして、写本は宮内庁書陵部のみ、版本は国会鷄軒・内閣・静嘉・慶大斯道・日比谷加賀となっている。

右の版本のほとんどを被見したが、明和八年以降、本書が再版された形跡はない。大田南畝の「石楠堂随筆」（「蜀山人全集」三所収）には、「一人一首の後、詩話の書といふへきは、近世綴北海の日本詩史なり、天明京都の火災にその板燬たり。」とあって、版木が焼失したらしいのである。諸本みな明和八年の版本である。したがって底本としては、初刷本できわめて保存状態のよい家蔵本の高田維亨旧蔵本を使用することにした。

本書には、湯浅常山が門人高田維亨に宛てた書簡がついており、それに

一、日本詩史御見せ忝致熟覧候近年種々新板之物出候へ共か様之物は無之殊の外珍しく面白千万忝悦申候則返進此内伝聞ゆへよほど聞違有之候又脱漏も多く存候又可録事もなき非ず委細は面晤可申承候

とあれば高田維亨（延享二年八月十七日生―享和元年八月三日没）が所持していたものとおもわれる。高田維亨は湯浅常山の「常山楼筆余」（五巻・安永三年刊）の富士谷成章の序文（明和九年七月）にもその名がみえる。

湯浅常山（一七〇八―天明元年一七八一）、名は元禎、字は之祥、新兵衛と称す。号は常山、服部南郭に徂徠学を学び、

岡山藩学に受け容れられず、明和六年蟄居を命ぜられている。この書簡は蟄居中に書かれたものとおもわれる。「日本詩選」に常山の詩は五首採られている。（巻三に一首、巻六に二首、巻十に二首）

「日本詩史」は、活字本として、「日本儒林叢書」三、「日本詩話叢書」一に収められた。またそのほか、西沢道寛訳注本（岩波文庫）がある。

構成

日本詩史序

武川幸順の撰文。幸順、字は建徳、南山と号した。京都の小児科医で堀景山門人。宣長とは同門である。のち法眼に叙せられた。安永九年（一七八〇）に五十六歳で没している。

日本詩史序

本書には、武川幸順の序とともに抽木太玄の序文がある。太玄、号は綿山、字は仲素、儒医柚木伯華（知雄）の弟である。文学を江村北海に、医を保生院法眼道啓に学んだ。眼科医である。明和元年（三十八歳）、法眼に叙せられた。天明八年、「日本詩史」刊行の年に没している。

日本詩史凡例

十一条にわたる詳細をきわめたもので、編纂の意図・方針等が四丁にわたって述べられている。

本文内容と特色

凡例によると明和三年秋に稿を起し明和五年に成稿をみた。編者の項でも述べたごとく、もと本書は十巻の体裁であったが、経費の都合もあって、その半を梓行せんとして次男悰秉に校訂せしめたが明和七年二月、仕事半ばにして病死したため鍾情の極のうちに北海は修訂をつづけ、弟清田儋叟をして重校せしめた。

巻之一　本書はわが国の詩学の変遷を略述したものであるが、ここでは、二十四丁にわたって凡例にもあるとおり

中古・近古すなわち白鳳時代より慶長末（一六一四）にいたるまでの朝廷文学、簪纓の辞藻を論じている。作者の略歴を叙し、作品を品藻している。

巻之二　凡例に示されているとおり、年代は第一巻と同じで、十二丁にわたり武弁・医者・隠者・釈氏・閨閤の辞藻を論じている。

巻之三　次いでこの三巻では、元和以後（一六一五―）の京師の地の文学を論じて兼て他州におよんでいる。二十四丁にわたっている。そして、巻之二、巻之三を合綴して一冊となしている。

巻之四　同じく元和以後の江戸の芸文、林家をはじめとして木門、護園さらに他州について二十丁にわたって叙述している。

巻之五　凡例にもあるとおり、この巻は第三・第四の余にして諸州の芸文について十七丁にわたり論じている。ところで巻之四、巻之五を合綴して一冊となし巻末に清田儋叟の跋文を付している。儋叟、名は絢、字は君錦、北海の弟であった。（編者の項、参照）

しかして、本書のなかで、もっとも主とするところは、巻之三以降にあり、つまり元和以後の芸文を論述するにあって、それ以前のものは淵源を示すにとどまっていることは明らかである。

この「日本詩史」は類書がなく、刊行されるや北海の師、梁田蛻巖をたいへんよろこばせたらしく、前述の高田維亨宛の湯浅常山の書簡（家蔵）に追伸のところで次のようにいっている。参考になるので掲げておく。

又申候詩史扨〻面白く存候本書ニも申候通夥しき近年世上新著之刊本出候へとも此書ニ似たる物もなく此書は面白く存候□□忝存候されとも蛻巖なとあまり褒過かと被存候何事も委細は期面晤候

いずれにせよ、当時問題の書であったことは疑う余地はない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

日本詩選

諸本

日本詩選　一〇巻補遺一巻七冊

「国書総目録」をみると、大部のものにかかわらず版を重ねていることがわかる。版本としてあげられているものとしては、

安永三版―内閣、長澤規矩也

寛政六版―内閣、静嘉

刊年不明―家蔵

の三種であるが、わたくしが被見したものは右の機関以外に、島根県立図書館山口文庫の所蔵本があるが、これは安永二年版であり版本としてはもっとも早い時期のものであり、京都の草屋宗八が発行したものであるが、残念なことに続編を欠いている。したがって本集では、安永三年版を使用することにした。巻末の「北海先生著撰目録」の裏に「安永三年甲午正月西堀川仏光寺下ル町唐本屋吉左衛門発行」とあり、玉樹堂から発行された。安永二年版とは発行書肆を異にしている。幸い、故長澤規矩也博士蔵本中に刷の良好な本をみつけ出し影印に付することにした。ただ巻六が欠落している為、そこは内閣文庫本を使用した。その影印を許可された内閣文庫に厚く謝意を表する。

構成

（序）

菅原在家撰。序文には「権中納言菅原在家撰」とある。

日本詩選序

江村北海の自序に編纂の意図が二丁にわたって書かれている。「安永癸巳」は、安永二年である。

日本詩選凡例

編纂の方針（編修の態度）が十項目にわたり記述されている。しかしとかくの評を受けた。つまり、広瀬淡窓の「儒林評」（「近世儒家史料」上冊所収）に、「北海ハ日本詩選ヲ作リタルニヨリテ、其名伝播ス。但シ其時ニ金ヲ取リテ生キタルモノノ詩ヲ多ク入レシト云フ評判アリシ。」とある。

日本詩選採択書目

数えてみると、一五七種の採択書目をあげている。主として別集を基本として採詩されているが、なかには総集（詞華集）からの採詩もおこなわれている模様である。例えば、「扶桑千家詩」、「扶桑名賢詩集」、「扶桑名勝詩集」、「熙朝文苑」、「停雲集」、「菉園録稿」、「鍾情集」などがあげられる。しかし総集などを利用して、とかく安易に新しく別の総集を作るといった幕末ごろの総集の傾向にくらべると編纂態度は実に精確を期したものであるといっていい。また、「日本詩選」には、服部維恭（南郭二男）の「鍾情集」、田中蘭陵の「蘭陵遺稿」といったごく片々たる詩集までもが採録されているのが特徴だ。

日本詩選作者姓名

さて、五二〇家の作者姓名の記述については、かれの「日本詩史」をはじめ門人永田観鵞（忠原）の「儒林姓名録」さらに「停雲集」などの総集記述を参考にするようすすめている。さて、「作者姓名」のうち、湯元禎が四丁と七丁とに重復している。なお、この「作者姓名」は、森銑三氏によって「近世人名録集成」第三巻（勉誠社刊）に影印に付しておさめられた。「日本詩選作者姓名」（三五三―三六二頁）、「日本詩選続編姓名」（三六三―三七四頁）

この作者姓名の記述の形式は、安永六年春に刊行された北海の姪伊藤君嶺の「日本詠物詩」の「日本詠物詩作者姓名」に継承されている。そしてこの「日本詠物詩」には江村北海、清田儋叟の序（文）が付してあるのである。

本文内容と特色

とかくの批評をこうむった「日本詩選」であるが、北海自身序文の中で、後世の批評にかなり神経質になっており、「選猶レ刪也。万取レ千焉。千取レ百焉不レ啻也」と慎重を期したといっている。また、「人面人心。取捨各岐」とあるごとく取捨に関して是非の論も人によって異なることをあげ、自分の嗜好によるほかないが、つとめて公平中庸を期したといっている。

事実、本書に採録された詩人五百二十名中、五首以上採録された詩人を表示してみると七十五名の多きにおよぶ。この中、上位二十三名の中には、木門の新井白石、祇園南海、室鳩巣がおり、護門では服部南郭、高野蘭亭、荻生徂徠、太宰春台らがいる。これによると、元和以来、安永にいたる詩壇を牛耳っていたのが木門と護門であることがわかり、等しく学界の認め得るところであった。

また、自ら北海が「人或誚三余多収二兄弟子姪詩一」と凡例ではっきりといっているように事実、伊藤錦里や清田儋叟や江村秉の詩を多く採録している。錦里は北海の兄であり、儋叟は弟であり、秉は次子である。

北海の師、梁田邦美は二十七首。同門の竜公美は十九首。同人の鳥山宗成（崧岳）は十八首。以上、北海と関係の深い人の詩が多い。

一方、「一時護園ノ学サカンナリシヨリ世上一同尸祝セシガ、近来ハ人ヤ、其ノ陳腐雷同ヲ厭ヒテ、是ヲモテハヤス事往日ニ及バズ。余トテモ好ム所ニ非ズ。」（「授業編」七、詩学第五則）と北海は護園派に冷淡であり、日常的で平静な詩情、精緻な観察や内省に富む写生派の詩人を尊重する傾向が明和ごろから北海によってまず起る。この「日本詩選」でも非古文辞の詩人の詩が多く採択されている。僧大典が十首、僧六如も十首、葛子琴が八首。

以上によって明らかなように、江村北海は古文辞派のものに限らず広く詩壇を網羅して採録したので門人までが「以為于鱗之選則紀律厳矣、何以不レ倣焉」と師、北海に質している。

	服部南郭	新井白石	梁田邦美	伊藤錦里	清田儋叟	高野蘭亭	祇園南海	竜公美	秋山玉山	鳥山宗成	服部元雄	室鳩巣	宇野明霞	松平秀雲	上柳四明	松崎観海	江村秉	服部蘇門	僧大典
巻之一 五言古詩	六	一	四	四	三	二	二	一	三	二	二	二	一	三	二	二	一	一	一
巻之二 七言古詩	四	二	二	二	二	一	三	一	二	一	二		一	二	一	一	一		
巻之三 五言律詩	六	七	五			五	四		三			三	三	二					
巻之四 同上				四	二			四		五	三					三	二	三	三
巻之五 五言排律	四	四	二	三	一	二			一	一	二	二	一	三	二	一	一		一
巻之六 七言律詩	七	七	五	五		三	四		二			二	三	二				三	
巻之七 同上					七			五		四	三					二	三		二
巻之八 五言絶句	四	五	四	四	四	四	三	四	四	二	一		二	一	三	一	二	二	一
巻之九 七言絶句	五	五	五			四	三		三			四	三	二				二	
巻之十 同上				四	五			四		三	二				一	二	一		二
合計（実数）	三六	三一	二七	二七	二四（二六）	二二（二一）	一九	一九	一八	一八	一五	一四（一三）	一四	一四	一三	一二	一一	一一	一〇

	巻之一 五言古詩	巻之二 七言古詩	巻之三 五言律詩	巻之四 同上	巻之五 五言排律	巻之六 七言律詩	巻之七 同上	巻之八 五言絶句	巻之九 七言絶句	巻之十 同上	合計（実数）
僧六如	一	二	—	一	一	—	二	—	—	三	一〇
荻生徂徠	二	—	二	—	—	三	—	三	—	—	一〇
僧原資	一	—	三	—	—	二	—	二	二	—	一〇
太宰春台	—	一	三	—	一	二	—	—	三	—	一〇
柳川三省（東涯）	—	—	四	—	—	三	—	—	一	—	九
伊藤長胤	—	—	二	—	一	二	—	一	二	—	九（八）
平野金華	—	—	三	—	—	二	—	一	二	—	九（八）
南宮大湫	—	—	—	二	—	—	二	二	—	二	九（八）
赤松滄州	一	—	—	二	—	—	二	二	—	二	九
柚木太玄	一	一	—	二	一	—	二	二	—	—	九

日本詩選続編

日本詩選続編　八巻首巻・補遺・拾遺各一巻七冊

「国書総目録」を検するに、これはさすがに版を重ねた形跡は見当らない。わたくしが被見したものは、国会図書館、内閣文庫、静嘉堂文庫の諸本と故長澤規矩也博士の蔵本である。長澤本は刷もよく初刷本とおもわれるので本集ではこれを底本として使用させていただいた。

構成

「日本詩選続編総目」に、

首巻　尊貴詩

巻之一　五言古詩　七言古詩

（以下略す）

とあるとおり、本書は「続編一～八終」の前に「首巻」を置く。この点が正編と相違する点である。この「首巻」には、「続編一」の序文と同時期の安永戊戌之冬の北海の一丁ほどの識語が巻首についており、「瓊鉾探レ海以来、上下正レ位、貴賤分定、尊貴自尊貴、士庶自士庶、豈可レ混乎、謹録二若干首一、冠二之編首一」とあり編纂の意図のほどが知られよう。ただ底本の長澤本をはじめ国会本・内閣本には首巻の十二丁の一丁のみが欠落している。

日本詩選続編序

江村北海の自序。二丁ほど。「安永戊戌之冬」は、安永七年（一七七八）にあたる。

日本詩選続編凡例

五項目にわたって記述されているもののうち「前編凡例曰、続編五巻、今也斯編巻数過レ之、亦不レ得レ已耳」と誇らしげにいっており自信のほどがうかがえる。また、前編に採択書目を標挙したわけであるが、この続編では採択いくばくもなく付録として十二書をあげたというのである。したがって採択書目の柱をあらたにたててはいない。

内容と特色

採詩数の多い詩人を、詩数の多い順にあげると、藪慤（一九）、松村延年（一二）、劉韶（一二）、神戸由道（一一）、古朴（九）、平元秀（九）、千葉玄之（八）、松尾金峯（八）、古屋鬲（八）、野村盛芳（七）、左九成（六）、毛利壺邸（六）、近藤顕（六）、磯谷滄洲（六）、杉岡道啓（六）、林貞亮（六）、長玄珠（五）、池匡卿（五）、岡部南嶽（五）、紀弘（五）、松永公路（五）、千伯済（五）、海希賢（五）、僧禅軾（五）の二十四名を数えることができる。これらは「続編」で新たに登場する詩人たちであるが、「前編」ですでに登場の詩人たちも「続編」で数多く登場し、その中で北海と関係の深い詩人たちの採詩数の多いのがいぜんめだつのが特徴である。例えば、清勲（二一）、山村蘇門（一五）のごとき。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com